

---

# ちゅうに的な存在 改訂版

uyr yama

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ちゅうに的な存在 改訂版

### 【Zコード】

N6316S

### 【作者名】

u y r y a m a

### 【あらすじ】

一コボを中心とする様々な中一を手にした転生者の、愛と苦難に満ち満ちたお話。

改訂前の話が、理想郷にて完結済みです。

「はあ～、憂鬱だ……」

この世全てをぐだりなく感じてくれる。

いや、違うか。ぐだらない存在なのは僕か……

僕には前世の記憶があった。

自分なりに精一杯生きて、そして死んだ記憶。

ごく普通の学校へ通い、2流程度の大学を出て、市役所務めの公務員になり、そして風邪をこじらせて死んだ。

覚えているのは、泣きながら僕の名前を呼び続ける母の顔。

親不孝な息子でごめんよ、母さん……、最後にそう言つて僕は死んだ。

死んだ筈だった。

ホント死んだ筈だったのに、気づけばぼんやりと見知らぬ天井を見

ていて。

身体が自由に動かない。声が思い通りに出ない。目も良く見えない。

初めはね？ この状況は何とか命が助かって、何らかの状況で身体が動かせないんだと思つていたんだ。

でも、ぼんやりと見える人の影が物凄く大きくて、そして自分を抱きかかえた時、気づいた。

僕は赤ん坊なんだって。

それからは自意識が閉じて、唯の赤ん坊、もしくは幼児として過ごしていたんだけど……

3歳ぐらいの頃に、ようやく意識の統合が完全に行われて今の自分になつたんだ。

前世の両親には申し訳ないけれど、今世の両親の事も大好きで、その上、可愛い妹までいたんだから今度の生は幸せ一杯に生きるぞ！

なんて思つてたのに、5才くらいになつた頃、気づいてしまった。いや、見てみぬ振りをしていたのが限界になつたと言つた……

僕さ、銀髪でオッドアイだつたんだ。

謎だ……。だつて両親は黒髪黒目だよ？ 妹だつてそうさー。

なのに何で僕だけ……？

その上、僕がちょっとでも微笑んだりすると、老若男女問わらず顔を赤らめやがる。

妙に動物に好かれまくる。異常なまでに身体能力が高い。  
物覚えが良すぎるし、頭の回転率が異常。

中一 だつて言いたいんだろ？

二コボ野郎だつて言いたいんだろ？

でもな、一言だけ言わせてくれ。

二コボなんて能力、最低だぞ？

微笑んだだけで惚れるんだぞ？

それってさ、本当に僕の事、好きになつてくれてるのかな。  
もしも、何らかの要因でこの能力が失われた時に、それでも僕の事を好きになつたままでいてくれるのかなあ。

そう思つたらさ、恋愛なんて出来なくなつちまつたよ。

それからは出来るだけ表情を変えない様にしてきたんだけど、無理だね！

どつかの勘違い系の主人公みたいに、表情が鉄のようにならないなんてムリムリ。

だつて僕は、両親も妹も大好きなんだもの。  
顔が綻ぶのは当たり前だろ？

でもさ、両親が僕の事を好きでいるのは、もしかして「コボのせいなんじや……

そんな不吉で悲しくなる事を思つてしまつ様になつた時、僕は両親の下を出て、学校を経営している祖父の下へと行く事にした。泣いて止める両親や幼馴染の女の子を置いて、僕は祖父の下へと行つたんだけど……

行かなきや良かつた。じいちゃんの所になんか。  
そうしたらもう一つの嫌な現実に気づかずに居られたかも知れないの。

祖父の名前は近右衛門。父の名前は詠春。妹の名前は木乃香。

僕の名前は近衛衛華。

今居る場所は麻帆良学園都市。

そうや、こりは『魔法先生ネギま!』の世界だったのや。

なんでもっと早く気づかなかつたんだつて?

普通さ、自分がマンガの世界に来たなんて思わねーよ！  
顔見てマンガの登場人物だなんて思わねーよー！

だつて、自分の父親だぞ？ 自分の妹だぞ？ そんな風に思える訳  
なんてねーだろー！

今だつて半信半疑だ。いや、3信7疑位か？

家に女中さんと言つ名の巫女さんが居たのは、僕も不思議に思つて  
はいたよ？  
でもさ、そんなの日常なんだから、気づいたら当たり前になつちや  
うんだよー！

まあ、それはもう如何でも良い事なんだけどね。  
マンガだなんて、実際ここに僕がこうして生きている以上、そんな  
の関係ないし。

ネギま！のストーリーなんて、すっかり忘れてしまつてるし。  
ここがネギま！の世界だつて気づいた事自体がビックリなくらいさ。

そんな訳で、初めはそれなりに平和に過ごしてましたんだ。  
出来るだけ人と関わらず、誰にも微笑を見せない様に気をつけなが  
ら。

でも、木乃香がやつて来た辺りからそれが崩れ始め……  
今も木乃香と腕を組みながら街を歩いていると言つ訳や。

「兄様、兄様！　ウチのこと、好き？」

胃が痛い…

内容は覚えていないが、これからネギま！ストーリーに関わる事が決定済みっぽいのがキツイ。

木乃香のクラスメイト全てが僕にポツしてると言つ現実がキツイ。

二コポを打ち消すために、神楽坂さんに叩いてもらつたりとかしたのに、全然消えなかつたのがキツイ。

二コポどじりか、ナデポまで持つていた現実がキツイ。

ああ、この先、僕はどうなつてしまふんだろうか？

せめて、せめて二コポとナデポ能力だけは失くしてしまいたい。

神様、もしもおられるなら、僕のささやかな願いを聞き届けて下さい。

そうでないなら、アレだ。

YOKOSHIIMAとかEMIYAとか召喚して下さい。別にKYOUYAでも良いです。

そうすれば彼等が全部受け持つてくれそうだし。

「はあ～、憂鬱だ……」

今、こうして僕の隣に居る愛しい妹が、僕を好きでいるのがニコボ  
のせいだったら。

そしてもし、突然その効果が切れて、今までニコボされていた人達

が一斉に僕の事を嫌いになつたら。

くだらない、本当にくだらない存在だ、僕は……

「どないしたん、兄様？」

「いいや、何でもないよ、木乃香」

多分、僕はこうして一生を過ごすのだろう。

他人の好意を信じられず、ろくに恋愛する事も出来ず。

そして、孤独に死んでいくのだ。

「兄様あ。ウチな、兄様のこと、だあーい好きやつー。」

憐げに笑う僕。

それを見て頬を赤らめる妹。

近くで僕の微笑を見てしまい、ポツしてしまつ人達。

本当に、ぐだらない。

僕は前世の記憶を持つていた。

25才まで生きた記憶が。

それなりに精一杯生きた記憶が。

そして、今の僕は15才。

中学3年生。去年の僕はリアル厨一だったと言つ訳さ。

何でいきなりこんな事を言い出したかと言つと、僕は今、心底困っている。

精々15年生きた僕はどうしていいのか分からぬ。

前世での25年の人生ではこんな事は無かつたし。

転生・憑依主人公って、25年+15年で精神年齢40歳です。

なんて言つけど、そんな事はないと思うんだ。

だって僕は40才になつた経験が無いもの。

だから最大上限みても、僕の精神の年齢は25才。

そんな25才程度の青二才では解決出来ない問題が。

本当にどうしようか……

僕は眼前で頬を桃色に染めている少女を見て、心底悩んでいた。

目の前の少女は、僕の大切な妹のルームメイトで親友。ツインテールに釣り目がちな目を、上田遣いで僕をチラチラと見ている。

指をもじもじして、緊張しているのか忙しなく身体を揺らす。

正直な話、少し好みだ。

僕がニコポなんて能力持ちじゃなかつたら、間違いなくお付き合いしたこと疑いない。

そんな彼女の名前は、神楽坂明日菜と言つ。

恐らくこの世界の元になつたマンガ、魔法先生ネギま!のメインヒロイン。

ネギ先生の恋人役と思われる。

僕が必死で思い出したストーリーでは、

彼女はパソコンの中から出てきた、とある亡国のお姫様。

記憶を失つて彷徨う彼女は、とある魔法先生に憧れて東大を目指す。

そんな時、男のくせに麻帆良女子寮の寮長になつたのがネギ・スプ

リングフィールド。

彼が巻き起こすちょっとエッチなハートフルラブコメディー。

多分だが、ネギ先生とやらが現れるのはまだ先の事なんだろう。  
なんせ僕の妹や明日菜ちゃんは、僕の病気と一緒に中2。  
いくらなんでも中2じゃ、東大を目指す少女がヒロインのマンガには成り得ないだろう。

と言う事は、早くても後2年は大丈夫と言つ事なのだろうか。

それにしても何だ、この世界の東大は魔法も教えるのだろうか？

この世界の東大、マジパネ。

いや、そんな事はどうでもいいんだ。

問題なのは、彼女が僕に「学祭いつしょに回りませんか？」と聞いてきた事だ。

正直な話、言われた瞬間は素直に喜んだ。

こんな可愛い女の子から誘われて、嬉しく思わないヤツなんてないだろ？

でもさ、彼女が僕の事を好きなのは、二コボの所為なんだ。

そう思つたら空しくなる。

この考え方自体が傲慢なんだと分かっていても。

「あの……なんか予定があるんなら、別に……」

田の面端に、今にも零れそうな位に涙を溜める。

こんな顔されて、断る事なんて出来ない……

でも、なあ……

もちろん、ネギまーストーリーがビリの「いつのなんて悩みじゃない。この世界は僕が生きる世界であつて、決してマンガの世界の中に潜り込んだなんて思つてないから。

何度も言つたび、「コボだ。

この能力を、すんごく性質の悪い洗脳なんだ。好きでもない男に強制的にボさせる能力。

そんな能力で僕の事を好きになつた女の子。

この能力が無くなつた時、それでも彼女が僕を好きでいてくれる自信が無いのだ。

本当にくだらない男だ、僕つてヤツは！  
情けなく、最低で、本当に、本当に……！

「2日田の匂からだつたら時間あるよ

偽りだと分かっていても、相手の好意を振り扱えない自分が、とても嫌いだ。

結局、自分がニコポを使って、良い思いしようとしてるだけなんだ

と。

それでも、明日菜ちゃんがパアーツとひまわりみたいな笑顔を見せてくれる。

自分がニコポなんて物で洗脳されてるなんて思いもせずに。

そんな彼女の笑みはとても魅力的だ。

特に下から覗き込むような上目遣いは、僕の心を高鳴らせて止まない。

ああ、この笑みがニコポなんかのせいじゃなかつたら。

僕は迷わず彼女の気持ちに応えただろう。

と、そんな風に内心落ち込んでいた僕だつたけど、不意に脳裏に響くアラームに、ハッと周囲を見渡した。

知っている。

このアラームは、僕に危険を知らせる『ちゅうに』の一つだ！

「そうやな～、だつたら3人で回るつな、兄様。そ・れ・に、ア～ス～ナ～～！」

「ヒイツ！？ 」「このか……？」

事実、のそりと影から滲み出るよう現れた木乃香に、このアラームの正しさを実感した。

いや、ちょっと待て！

木乃香は僕の大切な愛する妹だ。  
決して危険だなんて思ってない。  
だから木乃香！

獲物を前にした獅子のよつな視線を僕にむけないで！

そんな僕の想いが解つてくれたのだろう。

僕の大切な妹である彼女は、二コリと僕に笑つてみせた。

た、助かった……

だが、僕は助かつても、明日菜ちゃんは……

木乃香は明日菜ちゃんの頭に右手を置くと、ギリギリと万力の様に締めつける。

「なあ、ウチも一緒でええ？ 兄様あー、お・ね・が・い」

甘えた声で言つてくるも、彼女の背後から黒い何かが噴出している。

ヤバイ！ 僕はこの状態を良く知つている。

僕がまだ京都に居た頃の話だ。

幼馴染の女の子2人で遊んでいると、木乃香が現れ……

ダメだ！ 忘れろ！！ 川に流されてなんかいないつ！！ あ つ  
！ 逃げて つ！ もちが んつ！！

僕は内心の恐怖を表に出さないように必死になりながら立ち上がる。

「うそ、良いよ木乃香。待ち合わせは～、やうだな、世界樹の前で  
PM12:30ヒートコロド」

やつぱりと、木乃香と明日菜ちゃんの答えも聞かず、走つて逃げた。

本当に情けないヤツだ、僕は……

「みぞやあ つつ……！」

明日菜ちゃんの断末魔の叫びを聞きながら、僕はやつぱりいた。

「いつうー！

何すんのよ、このかつ！

「ウチの兄様に手を出すとする淫売を殲滅しただけや」

「淫売つて……、アンタねえーつ……」

「大体アスナは高畠先生の事が好きだったんよね？」

「そんな昔の話されてもね。そんな事より、アンタ、私の『トー』の邪魔しに来ないでよつ！」

「ふつふーん。アスナなんかに兄様任せたら、暗がりに連れ込まれて手籠めにされてまうわ。ウチがしつかりと見張つとかんとな」

木乃香はそう言つと、手をパンパンと2回叩く。

するとシユバツと音を立て、髪を片結いしている少女が木乃香の眼前に現れかしづいた。

「兄様の警護、しつかりとな。アスナみたいな輩が多数現れる時期や。兄様を誘おうとする女、全て見敵必殺や」

「はい、分かっています、木乃香お嬢様」

「良し、行くんやつ。頑張つたらウチと一緒に兄様に甘えるんを、ほんのちょっとだけ許してあげるな」

「はっ！ ありがたき幸せ。ではっ」

出て来た時と同じく、シユバツと音を立て消える少女。

「相変わらずね、刹那さん。とにかく、このか。ウチのクラス、忍者が2人もいるなんて変じゃない？」

「アスナ、楓さんの忍ばない忍は別として、せつちやんは忍者やない。侍や」

「どこのがよ……」

胡散臭そうに言い捨てる明日菜。

木乃香はそんな明日菜に、その胡散臭い笑みを更に深くすると、彼女の太ももに手を置いた。

「キャツ！？ ちょっとこのかっ！ なにするつもつよ……」

「何つて、アスナ。兄様と話して濡れたやう？ それを確かめようと思つてな」

木乃香のスカートの中に伸びようとする手に激しく抵抗しながらも、まるでトマトのように真っ赤になつた明日菜を見て、

「まあ仕方ないんやけどな。兄様は、黙つてただけで女を発情させる、変な力の持ち主やから……」

兄様の傍にいたいんやつたら、せめてあの不可思議な力に対抗できるようになってから。

もっとも、自分以外の女を兄様の傍に置くつもりは毛頭ないけど。

そうせせら喧う木乃香だった。

僕の中に眠る、いくつもの厨二的な力。

その中でも特に消えて欲しい力が2つ、僕にはある。

一つはニコポン。

いかなる堅牢強固たる心の壁を持つ女性でも、僕が微笑むだけで恋する乙女になってしまい魔の力。

人の好意を信じられなくなってしまうこの力は、僕の心をどれだけ冷たく凍らせてきたことだろう。

好きな人に好きと言われても、それが本当の好意から来るものだと信じられない。

そんな恐ろしい力だ。

そして、もう一つは……

何でこんな事に！？

恐怖で上手く回らない頭で必死に考える。  
いつもなら寮に帰っている時間だ。

だけど、僕は今日に限つて寄り道三昧。  
珍しく遊びまわった拳句、まっすぐ寮にも帰らず、何故か森の中へ  
と行つてしまつた。

そこに居た、時代錯誤なのかコスプレなのか、陰陽師みたいな格好  
をした男。

彼は僕を見るなり変なお札を投げつけてきた。

なんだ？ そう思う間もなく、其処に現れたのは大きな鬼。

その鬼が、地面に落ちている石を拾うと、僕に投げつけてきた。

「があつ！？」

石を腹にまともに受け、僕は地面を転がり回る。

痛い、痛い……つー？

痛みから呼吸が出来ない。

そんな僕を男は嘲笑う。

そして、

「殺せつー」

その言葉に恐怖した僕は、必死に逃げようとする。

ハウツ、ハウツ、ハウツ、ハウツ……

呼吸が荒い。

手も足も思ったように動いてくれない。

身体の震えが止まらない。

目の前の存在が恐ろしい。

怖くて怖くて如何にもならない。

誰か、助けて……

そう思い、叫びだしたくても、恐怖で口が回らない。

目の前の鬼とおぼしき化け物が、右手に持つ大きな金棒を振り上げる。

「すまんなあ、にいちゃん。これも仕事や、堪忍なあ

何故か関西弁で喋る鬼は、どこか陽気に僕に語りかける。とても残虐に、にやついた顔で……

ああ、ここで、僕は、死ぬのか。

漏らしてしまったのか、下半身がじんわりと熱くなる。  
歯がガチガチ鳴つて止まらない。

僕は自分を厨一的な存在だと思っている。

恐らくだけど、鍛え上げれば誰にも負けない俺TOKOEEEEE  
EEEが出来るはず。

でも、僕は自分を鍛えたりなんかしなかつた。

だってさ、僕は人を殴る事も出来ない普通の平凡な日本人だもの。  
鳥や豚の肉を食べる事が出来ても、鳥や豚を殺す事なんて出来やしないもの。

そんな平々凡々な僕だ。どんなに修行を重ねたって、誰かを傷つけ  
るなんて出来やしない。

だけど、今、こひして危険を田の前にして思つんだ。

自分の身を守れる位はしても良かつたよね？ つて……

今更だ、本当に今更な話だ。

いつも僕はこうなんだ。

言い訳をして、世間を斜め見て！

でも、それももう終わり。

鬼が金棒を振り下ろすのが、スローモーションの様にゆっくりと見える。

身体が動けば、簡単にかわせる位に。  
動けば、だけど……

僕の身体に金棒の影が覆い被さつて来た時、視界の端にあの娘が見えた気がした。

「衛華さまあ　　つー？」

せつねさんの声が聞こえた、そつ思つた瞬間、僕の中の何かが弾け飛んだ。

背中が熱くなる。

制服とシャツが背中から破れ、12枚の光の翼が現れる。

翼から発する光は世界を満たし、目の前にいる鬼は手に持つ金棒ごと塵となつて消えて行く。

そして、僕に鬼をけしかけて来た男も。

僕は、人を殺したのか……？

頭が真っ白になる。

思い浮かぶのは、どうしよう？ ただそれだけ。

目から涙がボロボロ零れて止まらない。

そう、僕は人殺しになつたんだ……

「大丈夫ですよ、衛華さま。貴方は人を殺してません」

暖かい声色。僕の大切な幼馴染の声。

「せつちゃん……？」

「はい、衛華さま」

せつちゃんが僕を見てにっこりと笑うと、指を指し示す。

その先には、麻帆良における僕の保護者。

忙しいじいちゃんに代わって、色々と僕の面倒を見てくれる女性、刀子さんが。

その刀子さんの足元には、ボロボロになつたさつきの男が！

ホツとした……、心底ホツとした。

良く周りを見てみると、周囲にあつた木々が消え失せている。

翼の光で消し飛んだんだろうか？

そして、せつちゃんと刀子さん以外にも人影がチラホラ。  
せつちゃんの隣にいて、僕に手を差し伸べてくる龍宮さん。  
ウルスラの制服を着た女の子と、木乃香達と同じ女子中等部の子。

「おー龍宮っ！ 何をしてーるっ！？」

「何つて、衛華先輩に手を差し伸べている」

「それは私の役目だつ……」

せつちゃんと龍宮さんのやりとりに、命が助かつたんだと実感した。

平和な日常が戻つたのだと。  
恐怖が、終わつたのだと。

僕は油断していた。

せつちやん達に向つて、安堵から微笑みかけてしまつた。  
もつとも、見知らぬ2人の女子を除けば、すでに一コボに汚染さ  
れている人達ではあつたけど。

女子達は一齊に頬を染め上げる。

刀子さんを女子って言つて良いモンだか分からぬけどね。

あつ、しまつた！ そう思つた時だ。

僕に秘められていた、もつ一つの力の片鱗が現れたのは。

彼女達は頬を染めながら、時間が止まつた様にぼ～っと僕を見つめ  
る。

サアーッと一陣の風が吹いた。

さつきの僕の翼から発せられた光でも浴びたのかなあ？  
彼女達の着ている服が、僕の目の前で塵となつていく。

キレイだなあ。本心からそう思つ。

せつちやんの真つ白い肌に、小さな胸。  
龍宮さんの褐色の肌も魅力的だ。  
刀子さんの大人の色気。

ウルスラの子のバランスが取れた肢体も魅力。もう一人の中学生っぽい女の子も、発展途上でこの先が楽しみである。

なんて、現実逃避をしてみた。

僕、悪くないよね？

さつきとは又違つた意味で、時間が止まる少女達。

一瞬の間を置いて、

そして、ウルスラの子の腕が黒く染まっていく。ブルブルと震え、僕の方に駆け寄ると、

と叫びながら、僕に鉄拳を喰らわせた。

「もういい！？」

顔面に激しい衝撃と同時に、気づいたらクルクル宙を舞う僕。地面に落ちるまでの短い時間で僕は悟った。

これは、『ラッキースケベ』だと。

そうして僕は、意識を手放した。

次に気づいた時は、病院のベッドの上だった。  
土下座して謝るウルスラの子、高齢さんを見ながら思つた。

ラッキースケベは僕には耐えられない。

スケベでラッキーな思いをする度に、暴力的行為を受けるのだ。  
とてもじゃないが、このままでは死んでしまう。

あんなマンガ見たく宙を飛びぶ程の一撃。

今こうして生きてる事自体が厨一だ。

あれ？ やつ言へば……、

僕は病室に集まっていた、せつちゃん、龍宮さん、刀子さん、高音さん、愛衣ちゃんに向つて聞いてみた。

「あの、僕の着替え、どうしたんですか？」

やつ、僕の下半身はお漏らしで濡れていただから。  
恥かしいナビ本当にビビったの？

そんな思いを込めて彼女たちを見つめると、

「さあ、やひそろ帰りますよ、皆さん」

刀子さんの言葉に、皆さん一斉に病室から出て行く。  
僕の目線を受けないよつて田を逸らしながら。

「ねえっ！ ホントにビビったの？ ……」

「あ、ああ、みんなで大切にわけ「オイ、龍宮っ！ ……」

せりあせんが籠面さんの言葉を遮り、そのまま何食わぬ顔で出て行く。

僕は…………もう…………ダメだ…………

そう、僕が忌避する2つ目の力。

それこそが、ラッキースケベである。

この力のせいで、僕はこの先、様々なトラブルに巻き込まれ、そして……

ああ、神さま。どうか僕の願いを聞き届けてください。

贅沢はいいません。

せめて、せめてこの2つの能力だけは、消えて頂けませんでしょ？

今日も僕は、決して叶わぬ願いを、空に浮かぶ星々にむかって願うのだ。

ぱたん、ドアを閉めるなり、一斉にはふうと熱い溜息をこぼす女た

皆一様に太ももをすりすりと擦り合わせていた。

ここまでよくも理性が保つた物だ。

まあ、衛華さまに不埒な行動を取らうとすれば、この剣で斬つて捨てたが。

ふふふ、と誰にも気づかれぬ小さく嗤つ。

もつとも、大きく声を出して嗤つても、今の彼女達が「気づく」とはなかつたろうが。

頭の中がピンク色。

もはや衛華のことしか頭にないのだ。

そんな彼女達をもう一度、見下すように嘲笑する。

そうだ。衛華さまは、えいくんは、私とこのちゃんとだけの大切な人。キサマらは、衛華さまの着ていた服の切れはしだけを慰みにしているとい。

くすくす不気味に嗤う刹那はだがしかし、寮に帰るなり、自分の分の『少し湿つた切れはし』を木乃香に奪われてマジ泣きした。



僕は今、途方に暮れている。

思惑とはまったく違った方向に世界が進みつつあると言つか  
僕のほのかな期待を裏切り、僕の最後の希望の火が消え去ってしま  
つたから。

もちろんあの子が悪い訳じゃ無い。

勝手に期待した僕がバカつてだけだ。

あの子供、ネギ・スプリングフィールドを……

なぜ僕がこんな事を言つてゐるかと言つと訳がある。

僕はラツキースケベに目覚めてからというもの、毎日が地獄だった。  
街を歩けば目の前の女性のスカートが捲れ、躊躇は女の子の胸を齧  
掴み。

気を抜いて何処かの部屋に入れば、中には裸の女の子。

お風呂に入れば何故か木乃香が裸で……

眠ろうと横になれば忍者が……

人気の無い所で一息つけば吸血少女が茂みに……

ああ、後半はちょっと違つか。

でも分かるだろ？ 僕がラツキースケベに遭遇する度にどうなる  
か。

天に飛び、地にメリ込み、人にボコられる。

これぞまさしく天地人。

そんな毎日送っていたある日、いつもの様に石に躊躇なく転び、転んだと同時に女の子を押し倒して胸の谷間に顔を突っ込んでしまった。そしていつもの如く、殴り飛ばされ宙を舞い、地に落ち、更にボコられてた時に思い出したんだ。

本当のネギま！のストーリーを！！

そう、ネギま！は東大を目指す漫画じゃなかつたって事を…！

『チートな子供先生』が活躍するトンデモバトル漫画だったんだよ！

僕は脅威のリカバー能力でアツと言うに怪我を治すと、必死になってネギま！ストーリーを記憶の底から掘り起こしていった。

悲しい過去。天才的頭脳。スーパー戦闘能力。ラッキースケベ。そして、ハーレム構築能力。

この子供先生は、僕と同じ『ちゅうに』なんだ！

仲間が出来て嬉しいとか、そういう話じゃない。

僕の二コボに犯されている中心的なクラス、木乃香のクラスに子供先生が就任するんだ。

と、言つ事はだよ？ 彼のハーレム構築能力によつて、僕の二コポに犯されてる少女達が寝取られていくんだ。

胸に微かな痛みはあれど、それ以上にこの罪悪感から解放されいく事を望んでしまう。

少し病んでいる考え方だと言つのは分かつてゐる。

それでも僕は望むんだ。

前に神様に望んだ、EMIYAやKYOUYAやYOKOSHIM Aの代わりを。

僕以上の二コポで、この世界の女の子達を蹂躪して貰うのを。そして、もしも子供先生の二コポを受けても尚、僕の事を好きだと言ってくれたのなら、僕はその子の事を一生涯かけて守り通す。

その子だけを愛し、そしてその子の為に死のつ。

もしも誰も僕の事なんか気にしなくなつたら、それはそれでいいさ。元々僕は一人寂しく生きていくつもりだったのだから。

悲しい事だけど仕方の無い事だから。

僕はそんな想いを胸に秘め、彼がこの学園都市にやつてくるのを一

日千秋の思いで待ち侘びた。

そして、高等部に進学する為の準備に追われていたその時、ついに彼がやって来たのだ。

学園中に激震が走った。

可愛らしい顔の子供先生。

きつと男の娘つてのは、こうこう可愛らしこ子の事を言つただねつて思ったよ。

これは人気が出ない訳が無い。

案の定、彼はあつという間に人気者になり、予定通りにフラグを立てまくり、そして……

今では僕のルームメイトって訳さー！

最初はね？ 木乃香と明日菜ちゃんの部屋に間借りしてたんだよ、この子。

木乃香と明日菜ちゃんのグチめいた文句を聞きながら、僕は計画通りとほくそ笑んでいたんだ。

なのに、なのにだ！！

気づけば学園都市は子供の先生の事など無かつたかの様に平穏を取り戻し、高校生になつた僕の部屋に彼がやつて来た時、全てが終わつたのだと僕は悟つた。

男の子が女子寮に居るのは可笑しいと、女子生徒皆さんのが常識を持つて学園長に訴えたからだ。

しかも中心になつて訴えたのが木乃香のクラス、要するに、ネギ先生が受け持つていたクラス。

自分が好意を持つ子を追い出すなんて普通はしないだろう。

その上、追い出す原因で一番大きかつたのが、近くに男の子なんか置いていたら僕に変な誤解をされてしまうかも知れない。

そんな理由……

つて事はだよ？ ネギ先生のハーレム構築能力を、僕のハーレム構築能力が上回つたつて事じやないかツ！！

しかも、しかもしかもしかもだつ！ しの子、男の娘じやねえ一つ  
！！

女の子じやねえ————かあ——————つ！？

なんで、なんで気づかないの、木乃香達は！？

一緒に暮らしていなんでしょうがつ！？

「あつ、おいしいですか？ 衛華さん」

「う、うん、凄くおいしいよ、ネギ先生」

彼……もとい、彼女が作った夕食を食べながら、そつき聞いた事を  
思い返す。

なんでも、聞けば英雄の子供だからと色々な意味で狙われ、女の子  
のままでは危険だったんだそうな。

身近な人達の進めもあって、彼女はコレまで男の娘として生きてきたんだって。

なにこの原作改変？

なにこのチートオリ主の為の原作主人公殺し、及びハーレム要因追加はっ！？

疲れた……

「本当に疲れた……」

「でしたらお風呂に入りましょうか？」

「へっ？」

「お風呂流しますね」

「いや、ネギ先生は女の子でしょ？ ダメだつて！…」

「ぼく、まだ10歳になる前の幼女です。それに衛華さん、ぼくは間違いが起きても気にしません。むしろドンと来いです！」

素早く僕に無詠唱の戒めの風矢を放ち、僕の自由を奪うと服を剥ぎ取っていく。

「ちょっと!? 何をする気なの!」

それにこの子、やっぱりチートだよつー?」

光の翼が顕現してからと書いてるもの、こいつそり鍛え上げ、今ではそちら辺の三下を一瞬で蹴散らせる程になつた僕が、まったく抵抗が出来ないよー!?

シャツを脱がされ、ズボンを脱ぎ下ろされ、そしてパンツに手がかかる。

「いーやーだあーつー! だーれかーーたーすけーてええええつー!」

「大丈夫です衛華さん。痛いのはぼくですよ? あつ、キツすぎでちょっと痛むかも知れませんね? でも、スグに気持ち良くなれるよ!」

する、する、と少しづつ僕のパンツがズリ下げられ、遂には僕の息子が「こんにちわー!」する瞬間、天の助けが舞い降りた。

バリーン! と部屋の窓ガラスを割つて……

「何やつてんのよ、ネギー!」

「ナニって……コレからですよ、アスナさん」

ネギ先生の挑発的な言葉にヒートアップした明日菜ちゃんは、気と魔力を合一させネギに襲い掛かった。

あれって確か咸卦法とか言うスーパーチート技能だよね？ なんでアスナちゃんが？ そんな技使つと簡単に人を殺しちゃうよ？

でも、ネギ先生とてスーパーチート。

そんなチート技能を使うアスナちゃんと、ほぼ互角の勝負を繰り広げる。

僕の部屋を滅茶苦茶に破壊しながら……

「アンタっ！ 女の子だつたんじゃないのよー？ せつせつと女子寮に戻んなさいーー！」

「いやー残念ですね。アスナさん達に追いつかれた所為で、もう戻れませんよ。はっはっはっ」

「ムキイーつ！ 衛華さんは私のよつー」

「ふざけないで下さい！ 衛華さんはぼくの絶対運命ですー！」

「お父さん捜してるんでしょー。せつせつと捜しに逝きなさいよーーー！」

「昔の事ですよー。今はもっと大切な人を見つけたんですよー。男親よりも好きな男を取つて何が悪いんですかっーー！」

「うう……、それはそうよね。でも、許せんつ……。」

「アナタに許される必要性なんてありませんー。」

「ああ……、僕は……、どうしたら……」

「気づけばアスナちゃんだけでなく、次から次へと増えて行く女の子達。」

「みんな、僕のナデポに犯されている女の子達。」

「みんな、どこか楽しそうに喧嘩して、僕を取り合っている。」

「望みが叶わず、結局僕のニコボを無効化出来なかつた。」

「なのに、何処かホツとしている自分が居て……」

「本当に最低ヤツだ、僕は。」

「でも……、昨日まで感じていた心の重石が取れた気がする。」

「やつぱり怖かつたんだね、僕は。」

今まで好意を向けてくれた人達が、僕に無関心になるのがさ。

くすつ。

僕は自嘲めいた笑みを浮かべ、そして……

今今まで喧嘩して暴れていた子達が一斉に僕を見て顔を赤らめた。

ああ、しまった。やつてしまつた。こんな時に、一番やつてはいけない事を。

一口ボを。

少女達は頬を朱色に染め上げながら、それでいて何処か恐ろしい目をして僕を見つめ続ける。

ハアハアと荒く興奮した息遣いで。

戒めの風矢で拘束された僕が、逃げ出す事が出来ない状態で。しかも僕はパンツ一丁、しかも半脱ぎ状態。

そんな僕の状態に思い到ったのか、鼻から血を大量に噴き出しながら、一人、また一人とじりじり僕に近づいて来て……

「怖いっ！ 女の子なんだよ、君達は…！ そ、そんなはしたない姿で、何を…？」

「だ、大丈夫でござる。すぐこなんな事はござりなへなるござるよ」

「やうやく。ようこそ未来の為に、その身体を私に差し出すと決して！」

みんな携帯のカメラでパシャパシャと僕を激写しつつ、ぼ、ぼくは  
……や、や、や……やめ

ちゅうに的的な原作主人公がいない、このちゅうに的な世界で、僕は  
ちゅうに的の存在として生きていいくのだろう。

何度も世界を皮肉り、何度も自分を卑下しつつ、それでも何も変えられず。」

ねえ、お父さん、お母さん、大好きな妹、大切な幼馴染、僕の事を好きだつて言ってくれる皆さん。

本当に、僕の事が、好きですか……？

僕は、向けられる好意を信じ切ることが出来ずに、今日を、そして明日を生きる。

光の奔流が僕を包んだ。

この、新世界と呼ばれる世界を打ち消す力が。

明日菜ちゃんの力を使つた陰謀を食い止める為に。

背中の光の翼を最大限に広げ、明日菜ちゃんの力が拡散するのを防ぐ為に。

「ぐ、ぐぐ、ぐがああああああああああああああああああああああツツ！…！」

邪眼の宿つた右目が魔力のオーバーロードで弾け飛び、視界が赤く染まつっていく。

痛みと恐怖で心が壊れそうになる。

でも、まだだ。まだ、力を抜くわけにはいかないんだ。

僕の後ろには沢山の大切な人達が居るんだから。

ジャック・ラカンと呼ばれる男がいる。

ネギ先生のお父さんの仲間だった人だ。  
彼女はその人からお父さんの話を聞く為に、夏休みを利用して魔法

世界に行きたいと僕に相談してきたのだ。

実家に帰るぐらいしかする事が無かつた僕は、一緒に行つて欲しいと涙目で訴える幼女の嘆願に答える他無く。

何故か一緒にいて来る事になった、木乃香のクラスメイト達を引率しながら魔法世界に入ったのだ。

そこからは、単行本にして20巻は越える冒険の日々。ネギ先生の素性や、明日菜ちゃんの過去など様々な事が解り、そして……

明日菜ちゃんが浚われたのだ。

眼下に広がる魔法陣の中心で、彼女は儀式魔法の要となり、意思を奪われ、濶んだ瞳で虚空を見つめる。

「ユリ子が世界を救つた一つの方法なのだと彼等は言つ。

でもソレを認める訳にはいかない。

沢山の命が奪われるなんて認められない。

ネギ先生の言葉だ。

僕はその言葉に賛同し、明日菜ちゃんを救う為に命をかける事にしたのだ。

どうせ生きていっても、二コボの被害者を増やすだけの人生。ここで思い切り良く使っても後悔はない。

今僕が死んだら皆泣くだろう。でも彼女達は自由になるのだ。僕と言うタチの悪い鎖が消失する事で。もちろん簡単に死ぬつもりなんか無い。怖いし、それなりに心残りもある。

でも僕は確信している。

此処こそが、僕の命を賭ける場所なのだと。

明日菜ちゃんが渾われている場所に乗り込んだ僕らは、迫り来る敵の少女達を、自分の意思で二コボを使い無力化していく。嫉妬めいた視線を向けてくる木乃香のクラスメイト達の視線に気づかない振りをしながら、奥へ奥へと侵入していき、

儀式魔法の発動と同時に現場に辿り着いた。

血の涙を流して絶叫する明日菜ちゃんが居る。  
光を放ち、全ての魔法や不可思議な力が無効化され、僕はネギ先生  
や一ノ瀬まで一緒に来た子達に、心からの笑みで告げる。

「大好きだよ、みんな。この先は僕の仕事だ。必ず明日菜ちゃんを連れて帰るから、先に戻つて僕たちを待つていてくれないか?」

彼女達の抗議の声を、叱り付ける様な口調で退けると、僕は背中から光の翼を出して光の奔流に飛び込んだ。

「必ず、必ず帰つてきて下せー！私の、うひん、私達の元へっ！」

背後か聞こえる彼女達の声を聞きながら、

僕は右目に宿る魔の力、邪眼と、背中から発せられる聖なる力、光の翼で明日菜ちゃんの力を喰い止める。

僕の最大魔法、永久なる暴風雪で道を切り開くと同時に、明日菜ちゃんを抱きしめた。

彼女の完全魔法無効化能力を、僕のちゅうにぜんかいで防ぐために。

一枚、また一枚と、僕の光の翼が剥ぎ取られていく。  
明日菜ちゃんの魔法無効化能力を相殺するために。  
そして、僕の生命力が消失していくのが分かる。  
右目が潰れた時から赤く染まっていた視界が、暗闇になっていく。  
この世界全てから、僕と言う存在が消えていくみたいに感じる。

腕の中の明日菜ちゃんの暖かさも感じなくなり、僕は……

夢を見た。

前世の夢を。

大切な両親が僕に笑いかける。

元気だつたかい？

辛い事は無いかい？

友達は出来たのかい？

お前は不器用な子だから私達は心配なのよ。

僕は微笑む。

懐かしい暖かさに包まれて。

うん、元気だよ。

辛い事は一杯あるけど、何とか頑張ったよ。

友達は……あんまり出来なかつたけどね。

「ゴメンね、母さん。先に死んじやつたせ。

でもね、こつちでも僕はもつ……

母さんはいつな垂れる僕の胸に手をあて、トン、と軽く押した。

行きなさい、アンタを待つている子達のもとへ……

母さんの優しい笑みと、暖かい光に包まれながら、僕は思った。

なに? いのちゅうひイベント?

こんな事を思つてしまつて自分に絶望した……

そつと口を開く。

そこは知らな……、いや、良く知つてゐる。

ラッキースケベでボコられた後に良くお世話をなつた、麻帆良学園の医務室だ。

なんで？ 僕は確か魔法世界に……

そんな事を考へながら、ベットから立ち上がり立上がる。

ギシ、ギシ、と間接が鳴り、思つよつて動かない。

「衛華さん！　衛華さんが起き……」

声のする方を向いた。

そこには、ネギ先生と思しき人が。

僕が知る彼女と違い、背が伸び、ルビーの様な髪が腰まで届き、そして、可愛らしい幼女ではなく、美しい少女だ。

僕の胸に飛び込み、そのままワンワンと泣き始める。その声を聞きつけ、次から次へとやつてくる大人に成りかけの少女達。

どれも見覚えがあり、どれも知らない姿。皆泣きながら喜び、そして泣きながら怒る。

あれからどれだけの時が過ぎたのだろうか……。そう思う僕の隣に腰掛ける木乃香は、「3年や……、あれから3年も経つたんよ」涙をボロボロ零しながらそう告げた。明日菜ちゃんは号泣しながら何度も謝り、そして……超さんの言葉が僕の胸に突き刺さる。

「衛華先輩の力は、アスナさんの魔法無効化能力と相打つて全部消えてしまったネ」

何度も、何度も突き刺さり、そして、爆発した。

イイイイイイイイヤツホオ-----ツ---

心の中で喜びのダンスを踊りまくる僕。

顔が綻び、満面の笑みを浮かべる。

そして、近くに控えていた女医さんと女の看護師さんが、僕を見て頬を赤らめ……ないつ！！

身体中を巡っていた魔力を感じない。

背中から光の翼の波動を感じない。

邪眼が無くなつた筈の目が普通に見えるのに、それでも魔の力を感じない。

笑つても誰もポツしない。

僕は、救われたのだ。

これが命がけで戦つた僕への「」優美なのか？

ありがとう、神様！ ありがとう、前世のお父さん、おかあさん！

ありがとう、明日菜ちゃん！

僕は今だ謝り続ける明日菜ちゃんを抱きしめる。

「気にしないで、明日菜ちゃん。僕は逆に喜んでいるんだ。これで、よつやく普通の人生を歩めるつてね」

そう、普通の人生をだ。

3年間眠り続けた事による弊害は沢山あるだろ？  
それでも、ニコポを始めとするちゅうにが無くなってくれた事に比べれば小さいこと。  
あれは僕では如何にもならないモノだったけど、これからは違うのだから。

僕の栄養不足でコケタ類を何度も撫で、「ありがとう、衛華さん」  
そう呟く明日菜ちゃん。  
微笑むネギ先生達。

それを見て、彼女達がニコポの影響下から脱していると確信した。

それからの話をしよう。

僕はそれからと誓つもの、彼女達の面会を完全に断ると、ひたすらリハビリに精を出した。

せつからく一コボの影響下から抜け出したのに、今度は罪悪感で僕に縛られるのを防ぐ為だ。

少し距離を置くのが一番良いのだから。

そして半年がアツと言つ間に過ぎ去り、大検を受けた僕は麻帆大に入学する事になる。

恥ずかしながら、妹と同期つて事になつたけど。

ちゅうにの力が無くなり、明日菜ちゃん達とも少しづつ罪悪感では無い付き合いをしていく事になる。

事になつたんだけど、確かに罪悪感では無い。ちゅうにの力も殆ど無い。

「ニコポもナデポも無い。ないないないないないんだー！」

でも、ラッキースケベとハーレム構築能力はそのままだつたんだよー！

再び殴り飛ばされる日々を送り、気づけば不死身体質を再習得した。かつてニコポに犯されていた子達の殆どは、僕の事を良い友人程度に思っているみたいだけど、中には昔のまんまの子達も沢山いて……

「はあー……前よりは遙かにマシなんだけど……ホントに僕の事を好きなのかな……？」

寂しげに呟く僕の声を聞きつけた、元3・Aの子達 + ネギ先生。ニコポの影響をいつまでも持っている子達。

「ほんま馬鹿なんやから、兄さま」

「ニコポと言いましたか？ そんなの関係ないですよ、衛華さま」

「僕が貴方を好きなのは、そんな訳の分からぬ力の所為じやないですよ」

えつー？ なんでニコポのこと……？

「衛華さんが3年間眠っていた時に、うわ言の様に咳いていたから上」

明日菜ちゃんがそう言いながら、たわわに育った胸を僕の腕に押しつけ、それを見た他の子達がヒートアップしていく。

いつもの光景、でも、あれ？ だつたら、みんなは？

楽しそうに喧嘩する彼女達。

僕はさつきまでとは違う意味で胃がキシキシと痛む。ニコポの所為とか言い訳が出来ないのだから。僕はこれから、本当に好きなたつた一人を選ばなければならぬか。う。

でもま、とりあえず木乃香はないけど。

愛してはいるけど、あの子は妹だからね。

「兄様？ ウチと兄様は血い繋がつてへんよ？」

「へつ？」

「銀髪碧眼で白色人種なんて、どう考えても血なんて繋がつてへんやろ？」

「そ、そうだったのっ！？」

「だからな、ウチも候補に入れといてな？ それとな、一人を選ばれへんのやつたら……」

僕の耳元に口を近づける木乃香。

みんなでもええよ？

そっと呟いた声が、僕の脳裏で木霊する。

胃が……痛む……

でも、ちょっとそれもアリかも。

何て思つてしまつ。

ああ、ちゅうにが減つても尚、僕つて最低な野郎だ……

楽しそうに面接する皆を見て、懐かしいフレーズを呟いた。

「ひいて僕のひみつが、おわ、おわ、おわ……らしい？」

以上、旧版は、『2009年1-2月』までの原作設定です。  
この後、『2011年4月』までの原作設定を用いた改訂版。  
ネギ原作バージョンになります。

### 近衛 衛華 の人物設定

衛華自身は知らない事だが、彼は魔法世界のとある亡国の王の忘れ

形見。

王と旧世界の少女の間に出来た子で、彼は新旧両方の世界のハーフである。

当然、ウェスペタリア王国の王族的な血もその身に流れしており、とてもちゅうにである。

第1話での転生間もなくの頃に彼を抱き上げたのが父親で、その後すぐにえーしゅんに引き渡された。

それからはえーしゅんの実子同然の扱いを受け、実際彼は木乃香に言われるまでは知らなかつた。

同じウェスペタリアの血筋である明日菜の魔法無効化的なちゅうにと相殺する事で、殆どのちゅうにを失つてしまつ。

ニコポ・ナデポもその時に失くしてしまつのですが、その効果は永遠である。

衛華は気づいていないが、一度ニコポの影響下を受けた少女達はこれから先、ずっと彼の事をその胸の中で想い続けるだろう。ただし、既にニコポは持つていないので、これ以上の想いの蓄積はなく、彼女達にとつての永遠のアイドル的存程度なのだが。

衛華が眠つている間に、うわ言の様に呴くニコポの事を聞いた3-Aの子達は、素早く対応を検討。

結果、あやかの財力、超とはかせの化学力、桜子の幸運、朝倉の諜報、パルの扇動、のどかの読心、四天王を始めとする武力、ネギのカリスマを他の女達を討滅した。

もちろん、衛華は知らない事だ。

近衛 衛華のちゅうに

前世、悲しい過去、銀髪、オッドアイ、ニコポ、ナデポ、背中に光の翼、邪眼、えたーなるふおーすでぶりぞーどな魔法、ラツキース

ケベ、

再生能力、ハーレム、力を失い一般人、そして……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6316s/>

---

ちゅうに的な存在 改訂版

2011年11月12日02時36分発行